高岡の図書館

第102号
2017.1.4

編集・発行　高岡市立中央図書館（〒933-0023 富山県高岡市末広町１－７）　TEL 0766（20）1818　FAX 0766（20）1819

ひとづくりと図書館

富山県立図書館長　永　井　　衛

富山県庁の正面玄関に向かって右側の前庭に、石に碑文が刻まれた記念碑がある。平成15年の置県120年を記念して建立された「ひとづくり記念碑」である。碑文の「百年の計は人を樹うるに如くはなし」は、中国・斉の宰相、管仲の「一年の計画には穀物を植えるのが最もよく、十年の計画は木を植えるのが最もよく、一生の計画としては、人材を育てるのが最もよい」という言葉に由来し、ひとづくりの大切さを表現したものである。未来に向けて県民が力を合わせ、ひとづくりに邁進することを誓って建立された。教育熱心な県民性、情操や生きる力を育む豊かな自然など、富山ならではの文化と風土に、しっかりと根をはる言葉ではないだろうか。

文部科学省が、毎年小学６年生と中学３年生を対象に実施している、全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）の結果が９月末に公表された。富山県の平均正答率は、国語と数学・算数の計８科目すべてで全国平均を上回り、７科目で都道府県別の上位５位以内に入るなど、近年課題とされてきた「知識の活用」に改善が見られたという。テストの目的は順位づけではなく、学力や学習状況を分析して日々の授業や教育活動の改善に生かすことである。実は今年の中学３年生の国語Ｂの問題で、とても興味深い出題がされていた。それは学校図書館を利用する方法について問うもので、次のような内容であった。

問題の想定　中学生Ａさんは、宇宙エレベーターについて書かれた雑誌の記事（問題には雑誌の記事が印刷されている）を読んで、興味や疑問をもち、調べている。

問題の問い　（問ア）宇宙エレベーターの雑誌の記事を読んで、あなたが疑問に思ったことを１つ書きなさい。（問イ）問アについて学校図書館で調べる場合、必要な本をどのように探しますか。本の探し方を２つ書きなさい。

解答の例　（問ア）疑問に思ったことを１つ書いてあればよい。（問イ）「図書の分類に従って、自然科学に関する本が置いてある棚に行く」「図書検索用のコンピュータに、宇宙エレベーターと入力して検索する」「自分の疑問について司書の先生に説明して、本を紹介してもらう」など。

この問題の解説を見ると、出題のねらいとして「雑誌の記事から新たな課題を見いだし、自ら設定した課題を解決するために学校図書館を活用して、必要な本をどのように探すのかを考えることを求めている」とあった。今日の学校現場では、アクティブ・ラーニングが重要視され、これまで以上に知識の活用力や資料の読解力、問題の解決力を育むことが求められている。そんな折、小中学生の全国学力テストの問題で、図書館の活用の仕方について出題されたことを知り、図書館に携わる者として素直に嬉しい気持ちになった。

ひとづくりの根幹は教育であり、先人の知恵に学ぶことから始まる。子どもから大人まで、学校から地域社会まで、生涯にわたって広く「知の交流」に寄与する図書館の役割がさらに大切になっていると感じる。

ひとづくり記念碑

題字は「高岡御車山等由緒」による

利波臣志留志の活躍と志留志をめぐる謎

福岡歴史民俗資料館学芸員　高野　昭憲

私が勤務する資料館の第29回特別展「木舟城と石黒氏」において、木舟城主であった石黒氏の先祖をたどれば、古代砺波地方を拓いたとされる豪族「利波臣氏」に行きつくことを取り上げた。利波臣氏は奈良時代から平安時代初期にかけて、砺波郡司である大領（長官）、少領（次官）などの要職を歴代にわたって独占した有力な家系である。その利波臣氏の一族であるとされる人物に利波臣志留志がいる。利波臣志留志は、越中国守をつとめた大伴家持とともに、越中の古代史を語るときに欠かせない人物である。また東大寺大仏造営事業に深くかかわった人物としても知られている。この利波臣志留志の活躍のあとをたどってみよう。

1　利波臣志留志の活躍

利波臣志留志が歴史の表舞台にさっそうと登場したことは、『続日本紀』の聖武天皇、天平19年（747）9月2日条、「河内国の人で大初位下の河俣連人麻呂が銭千貫を、越中国の人で無位の礪波臣志留志は米三千石を、盧舎那仏へ寄進として献上したので、それぞれ外従五位下を授けた」で確認できる。米3,000石は現在の約1,200石にあたり、当時の上田120町の1年の収穫量に相当する。一地方豪族から一時にこれだけの量の米の寄進がおこなわれたことは、志留志の卓越した経済力を物語り、これを支える経済基盤が当時の砺波郡にあったことをうかがわせる。

当時、東大寺の大仏造営事業は財政的に行き詰まりの状況にあった。この事業の中心的人物はときの左大臣橘諸兄である。諸兄にしてみれば、政敵藤原仲麻呂との対立が厳しくなる中、事業達成のための打開策が必要だった。そんな時に河内、越中両国の豪族から大仏造営のための寄進があったことは偶然ではなかった。当時の河内国守は大伴古慈斐、越中国守は大伴家持でともに大伴一族であり、橘諸兄とは深い関係にあった。米田雄介氏は、この時の寄進は、橘諸兄と大伴一族が地方豪族と結んで仕組んだ政治的演出であったとみる。志留志は、この寄進により無位から外位ながら従五位下を授かり、地方から中央官界へ華々しいデビューを果たした。

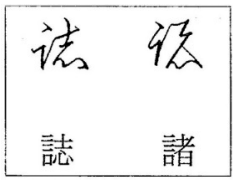
その後、『続日本紀』の称徳天皇、神護景雲元年（767）3月20日条に「・・・外従五位下礪波臣志留志を越中員外介に任じ、墾田百町を東大寺に寄進したことにより、従五位上を授けた」の記事がある。越中国員外介とは国司の定員外の介（次官）のことであり、この位に就いて越中国における東大寺荘園選定の仕事を国司や郡司、東大寺派遣の僧たちと協力しておこなったとみられる。正倉院に残る神護景雲元年策定の東大寺墾田地図に、「専當国司従五位上行員外介利波臣志留志」の署名を残している。また寄進した墾田百町は井山荘とされ、砺波市東部の栴檀野丘陵のすそ野の徳万・頼成付近に比定されている。丘陵をのぼった近くに池原集落がある。この集落には、規模は小さいながら荊波神社があり、境内には大伴家持が砺波郡の墾田地検察に来て詠んだ「荊波の里に宿借り」（万葉集巻18・4138）の歌碑が立つ。碑には「延喜式内社」とあるが式内社であるかどうかはともかく、この歌の舞台をほうふつとさせる雰囲気がある。おそらく志留志は、利波臣氏の本貫地である南砺・福光を離れてこの近くに住んだのではないだろうか。池原の荊波神社は、一族の氏神を奉斎する南砺の荊波神社から分霊・勧請したものでなかろうかと想像してしまう。

荊波神社の万葉歌碑

その後、『続日本紀』は、光仁天皇、宝亀10年（779）2月23日条に「従五位上の利波臣志留志を伊賀守に任じ」の記事を載せ、志留志は史料から姿を消している。

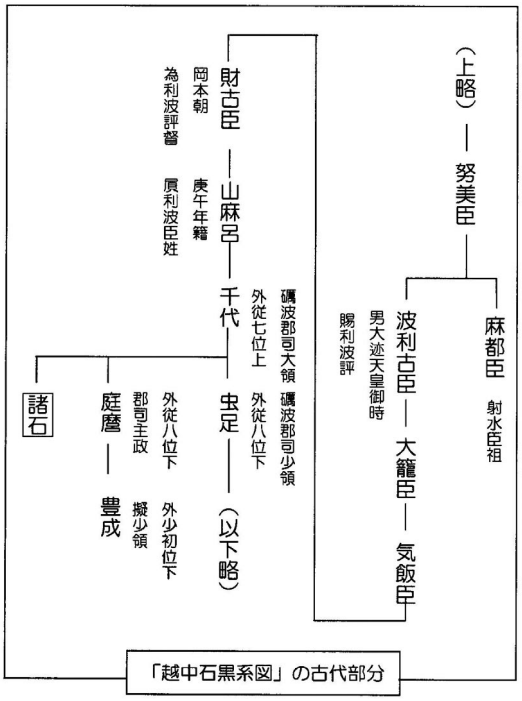
利波臣志留志をめぐっては研究者によって評価は多様である。米沢康氏は、志留志は多くの所領を抱え地域に絶大な勢力を誇りながら、注意深く中央勢力の流れに対応して、自

己の勢力を守り維持する老練な地方豪族の姿を描き出した。また米田雄介氏は、利波臣氏の古い系譜を伝える「越中石黒系図」に志留志が記載されていないことをもって、彼が一族でも傍系に属するものとし、砺波郡司を出す本宗家との確執から、中央官人へと転身していった人物と評価した。



諸・誌の崩し字

また近年下鶴隆氏は、これまで「越中石黒系図」に見えないとされていた利波臣志留志が、実は同系図中にあって、利波臣虫足の弟「諸石」と記される人物がそれにあたる。諸石の「諸」は正しくは「誌」であり、崩し字が酷似することから系図の転写過程での誤写であり、「誌」とすれば「シルス」とも訓めるとした。系図中に志留志の存在を積極的に認めようとする論考を発表したことが注目される。



「越中石黒系図」の古代部分

毎年３月になると奈良東大寺の二月堂でお水取り（正式には「修二会（しゅにえ）」という）の行事が行われる。この行事の中で、東大寺創建以来の寺にゆかりのある人々の名を時代を追って書き連ねた過去帳を読み上げる法会が営まれる。東大寺を創建した聖武天皇からはじまり東大寺の僧侶、仏師、寺を支援した各時代の権力者たちの名がならぶ中に、個人名では20番目に「米五千石奉加利波志留志（ヨネゴセンゴクホウガセル・リハシルノサクワン）」と読み上げられる。続日本紀に記された米3,000石とは石数が異なり、後にさらに2,000石の寄進があったかどうかは不明である。いずれにしても修二会が続く限り、地方豪族から無類の栄達を遂げた志留志の名は永遠に読み上げられることであろう。

２　志留志をめぐる謎

今回の特別展を通じて、利波臣志留志をめぐり大きな謎と思ったことがある。それは奈良時代の同時期にともに越中国で活躍した大伴家持が『万葉集』に志留志のことを一言もふれていないことである。橘諸兄と家持の関係、諸兄の東大寺大仏造営事業の進展に対する期待が込められていたことなどはすでに見たとおりである。大伴家持の越中守としての着任は、天平18年（746）７月である。志留志の大仏造営事業への米3,000石を寄進するのは、翌年９月であるから１年余り後のことである。この間、東大寺と志留志の間に国守家持が仲介し、斡旋の労を取り持ったとみることは自然な流れであり、多くの歴史家も認めるところである。

万葉集には、越中国関係の事柄が実に多く記されている。土地の自然や風物を詠んだ歌が多いのはもちろんだが、国守の仕事に関連した諸郡巡行の歌をはじめ、墾田地検察時の歌、京から訪れた官人や僧を饗応した時の歌など、ときの政治情勢を読み取ることのできる歌も多い。であるのに、万葉集に志留志の足跡はない。志留志の大仏造営への寄進は、家持にとっても越中での最大級の出来事であったろう。天平感宝元年（749）５月、家持が東大寺の占墾地使僧平栄等を饗応した時の歌（巻18・4085）が残るが、この時の宴席に志留志も連なっていたと考えられないだろうか。

《参考文献》

・『続日本紀』　宇治谷孟訳　講談社学術文庫　1992年
・『古代国家と地方豪族』　米田雄介　教育社　1979年
・『北陸古代の政治と社会』　米沢康　法政大学出版局　1989年
・論文・下鶴隆「利波臣志留志－中央と地方の狭間」（『古代の人物３－平城京の落日』所収、清文堂出版、2005年）

調査相談の窓口から

・・・・・ おたずねくださいQ＆A（戸出図書館）・・・・・

ちょっと知りたい・調べたい … そんな時、まずはスマホで検索する時代になりつつありますが、古くからある資料でなければ知り得ない情報もあるかもしれません。
図書館では、資料を手に取りページをめくって、必要な情報をお調べします。困った時は是非一度、図書館へお越しください。

レファレンスの例

Q：高岡市に合併する前の戸出町中心部の地図が見たい。また、旧町の境目が知りたい。

A：戸出町が高岡市に編入合併したのは昭和41年（1966）2月である。合併当時、中心部には東町、秋葉町、御倉町、巴町、寺町、馬場町、北町、本町、新田町、富久町、古中東町、古中中町、古中西町の13の町名があった（昭和46年3月の住居表示により現在は戸出町1丁目～5丁目）。図書館に所蔵する最も古い昭和46年発行の住宅地図では、戸出町に旧町名が付記されていたものの、境界線は表示されていなかった。昭和46年以降の地図ではいずれも確認できず。合併前の地図は所蔵していないことから、『富山県郷土地図総合目録』を参考にし、昭和38年発行の『小矢部市西砺波郡全図』を市外の図書館から取り寄せた。住宅地図ではないため詳細な戸別表示はないが、旧町名とともに境界線の表示が確認できた。

Q：戸出物産の社長であった吉田仁平の没年が知りたい。

A：吉田仁平は、富山県で初の株式会社であり戸出の繊維業の発展を支えた戸出物産の発起人の一人である。『戸出町史』等には生年の記載はあるが没年は見当たらず。町会議員・町長を務めていたことから、『富山県知名人事録』『富山県知名人物大鑑』を調べるが、同様であった。そこで訃報記事を調べることにし、「広報といで」の慶弔告知板を1号ずつ遡ると、昭和30年（1955年）7月号の死亡欄に「吉田仁平」の記載があった。ただし氏名のみが記載され同一人物とは確定できないため、中央図書館にある北日本新聞データベースで死亡日の翌日の記事を調べたところ、氏名に続いて「戸出物産の創立者で～」との記載を確認できた。

Q：戸出野神社の幌武者祭りに関する資料はあるか。

A：幌武者祭りは、現在も続く戸出野神社の秋季例大祭の際に行われる神輿の渡行である。『戸出野神社略記』には渡行の起りや配列の移り変わり、幟旗の並び等が記されている。『富山県の祭り・行事』『戸出町史』にも若干の記述あり。

（押川千陽　記）

長崎家の資料について

この度、江戸時代（元禄・宝永年間）から、代々高岡の一番町で町医者（蘭方医）を営んだ長崎家に伝わる古文書・古典籍・書簡など853点が当館に寄贈となった。

長崎家は代々、一番町に住み、現在の当主（10代長崎圭爾氏）は開発本町にお住まいである。同家には長崎浩斎肖像画、堀川敬周筆「解體畧図」などをはじめとして、医学書や写本、医家らの交流を示す書簡、林忠正から家族宛の書簡などの古文書や資料が伝来している。

長崎家の略歴

初代萩原玄澄（孫兵衛）は、もと長崎の蘭方医で、高岡に住むようになり、元禄・宝永の頃（1688～1710）高岡で開業した。いつの頃か、人々から「長崎医者」と呼ばれたため、長崎と改姓したと伝わっている。以来連綿と続き、７代元貞（正路）までは町医者として医業に携わった。

４代蓬洲（玄庭 1765～1829）は京都で学び、法橋位を受けている。続く５代長崎浩斎（1799～1864）は名は健、通称愿禎、幼名を哲次郎といい、19才で江戸に遊学。大槻玄沢（磐水・1757～1827）に入門し、蘭医学を学んだ。また、漢詩や書も学び、一時期は高岡詩壇の中心にあった。帰郷して家業を継ぎ、外科医として活躍した。蘭方眼科の高峰幸庵（譲吉の曽祖父）にも師事した。続く６代言定（正國・1826～74）もまた京都で小石元瑞の門下に学んで、家業を継いだ。６代の次男に明治期に西洋と日本との美術文化の交流に寄与した林忠正（1851～1906）がいる。同家が医業をやめたのは、残る資料から大正初め頃と思われる。

５代長崎浩斎肖像

『醫範提綱内象図　全』文化５年（1808）

主な寄贈資料（写真掲載分のほか）

- 「解體畧図」１巻　堀川敬周筆　文政年間
  安永３年（1774）に完成した『解体新書』の付図を写させたもの。敬周が４代長崎蓬洲の依頼で描いたものか。
- 『蘭東事始　全』（写本）１冊　杉田玄白著
  文政３年（1820）
  現在『蘭学事始』（明治２年初版　上下２編）の名で知られる杉田玄白晩年の著作
- 「ヒポクラテス肖像（依ト加得像）」１幅
  天保10年（1839）銅版画図入
- 『重訂解体新書』文政９年（1826）
- 長崎浩斎と大槻玄沢の往復書簡
- 林　忠正が使用した辞書や、洋書類など

最後に、今回長崎家資料が同家より寄贈されるまでには、本誌19号にも寄稿され、一昨年逝去された寺畑喜朔先生、相次いで亡くなられた正橋剛二先生のほか、早くから研究に着手された県外の諸氏、そして太田久夫氏のご尽力があったことを申し添える。

（野口充子　記）

高岡市長より長崎氏に感謝状贈呈

「福 岡 の 横 穴 墓 群」

西山丘陵は、小矢部川左岸沿いの高岡市から小矢部市に至る標高200m前後の丘陵地帯である。ここは古くから居住に適した土地で縄文時代前期の遺跡をはじめ、古墳・横穴墓や城館跡等多くの文化財が確認されている。

今回取り上げる横穴墓は、古墳時代の有力者が築いたもので、形態は横穴式石室に似ており、丘陵斜面に横穴を穿って作られたものである。横穴墓は複数で構成され、福岡地内には舞谷横穴墓群９基、城ヶ平横穴墓群52基、加茂横穴墓群26基、鳥倉陣取り山横穴墓群５基が確認されている。(2005年現在、崩壊したものを含む)

なお、「城ヶ平横穴墓群」は、「城が平横穴古墳群」として富山県の史跡に指定されているが、現在は「城ヶ平横穴墓群」の名称で呼び習わしているので、それにならう。

築造時期は古墳時代後期の６世紀後半から７世紀に造営されたものが多く、県内では呉羽山丘陵地域、氷見平野周辺地域、小矢部川左岸地域に分布し、９割が県西部に存在する。

ここでは、福岡町区域内で発見された横穴墓群のうち、２か所を紹介する。

【城ヶ平横穴墓群】

富山県指定史跡（昭和40年・1965年）

赤丸の舞谷・馬場にある古墳時代後期の墓。「こぶし荘」への登り道の途中で案内板が立っている。

この遺跡は、明治41年（1908）３月、地元の人たちが、次々と人骨・刀・土器などの遺物を掘り出したことから、「前代未聞ノ一大珍事」と新聞に報道され、「近郷近在ハ勿論遠ク数里ノ所ヨリ」学者をはじめ、大勢の人が発掘現場の見学に訪れたものである。このことは、『人骨古器発掘記録（吉井家蔵)』に詳しく記録されており、貴重な資料となっている。その記録には、当時の大騒ぎの状況を、「人骨古器ガ以外ノ人気ヲ引キタルハ不思議ナリ」と記され、困惑の様子もうかがえる。当時は横穴が住居跡なのか墓なのかについての論争があり、横穴を探索する動きが全国的にひろまっていたこともあり、名だたる学者が訪れたようである。

また、発掘者の写真、視察に来た警務長一行の記念写真や発掘当時の遺物・人骨の写真も残されており、多くの書物等に転載されている。

この時発掘された遺物の一部は帝室博物館（現東京国立博物館）と高岡市福岡歴史民俗資料館で展示・保管されている。

高岡市福岡歴史民俗資料館では、特別展開催時を除き、出土物の一部が発掘当時の写真と共に見学可能となっている。

東京国立博物館に収蔵しているものには、金環や勾玉、須恵器類、鉄製銀象嵌頭椎柄頭（ぎんぞうがんかぶつちのつかがしら）がある。柄頭は東京国立博物館の平成館にて常設展示されており、「銀象嵌頭椎柄頭　富山県高岡市出土」とのキャプションがある。

この鉄製銀象嵌頭椎柄頭は、装飾付き太刀の持ち手部分先端に付いたもので、太刀は中央政権からの拝領品と言う説が有力である。現存する県内出土品唯一のものであり、鉄製のものは全国でも20例しか確認できていないとのことである。また、古墳より被埋葬者の位が下と見られている横穴墓から出土したことにより、古くから研究の対象となっていたものである。

【加茂横穴墓群】

高岡市指定史跡（平成12年・2000年）

加茂集落背後の丘陵斜面にあり、加茂集会所付近に遺跡への道標がある。

発掘時期は、当時写された遺物写真から城ヶ平横穴墓群と同時期に行われたとみられるが、『人骨古器発掘記録』には加茂横穴墓のことは記載されていない。出土品の大半が散逸しているため、造営時期の特定が難しいが、城ヶ平と同様の年代が想定されている。但し、こちらの横穴墓が掘られた標高は46ｍ～77ｍとなっており、城ヶ平の150ｍ～160ｍに比し低地であるため検討が必要とのことである。

平成12年または平成17年に調査された時には土砂に埋まった横穴墓も多くみられたようだが、良好に遺存したものもあり、高岡市福岡歴史民俗資料館では実寸模型を設置している。

城ヶ平・加茂横穴墓群近辺にはいずれも「クマ出没注意」の看板があり、近寄りがたい場所となっている。県外には「吉見百穴」(埼玉県)のように、観光地となっている横穴古墳群もあるが、墓地なので静かな環境も良いものだと思う。

参考文献

『ふくおかの飛鳥時代を考える』、『特別展福岡町と古墳文化』、『まいぶん』、『黄泉之国再見』、『福岡町史』

（村本雅美　記）

高岡ミニ人物史

中田地区の薬業振興と中田町政に尽力した　今村政雄（いまむらまさお）（1898～1973）

明治31年（1898）12月11日、東砺波郡中田町中田（現高岡市中田）に生まれる。父政吉は売薬業者で、北海道における売薬発展の礎を築いた行商人の一人である。

高等小学校卒業後は薬剤師を目指し、東京の明治薬学校（現明治薬科大）へ進学するが、家庭の都合で薬学校を中退し、故郷に戻り家業を継ぐ。

大正５年（1916）から、政雄は北海道（士別・旭川・富良野地方）や滋賀県などへ配置に回り始める。数日かけて現地へ赴き、１ヵ月ほど滞在して帰郷する生活が続いた。大正８年には徴兵検査に合格し、シベリア出兵に参戦する。除隊後は再び売薬業に復帰し、家計を支えた。

大正３年に制定された売薬法を受け、中田地区でも若手売薬業者中心に製薬業の近代化を推し進める声が高まった。中田では、明治15年に三余堂という自由製剤中心の売薬営業所が存在していたが、本格的な製薬会社は設立されていなかった。大正14年６月６日、若手の業者63名が株主となり、資本金２万円で中田製薬株式会社が設立される。初代社長として松下久作（後に玖資と改名）氏が就任し、政雄は支配人として社長を支えた。昭和15年（1940）、松下氏の死後、中田製薬の第２代社長として政雄が41歳の若さで就任。政雄は前社長の死去の悲しみに浸る間もなく会社の発展に尽力した。しかし、戦時体制の強化により、製薬業界をめぐる環境は悪化する。県の方針により昭和16年、中田製薬と般若野村仁盛堂を解散し個人事業者と合同で戦時協力会社として報国製薬株式会社を設立し、政雄は取締役社長に就任。軍需医薬品や家庭薬増産のため工場はフル稼働した。

昭和20年、「共栄製薬株式会社」に社名変更し政雄は代表取締役社長に選出される。戦後の混乱の中、極度の品不足により、医薬品は飛ぶように売れた。また、農村工業基幹工場として澱粉の生産にも着手する等、事業は拡大の一途をたどっていた。昭和23年新薬事法が公布・施行され、配置薬業は薬局・薬店と並ぶ薬の販売業として明確に位置づけられた。共栄製薬は配置向け家庭薬生産を基軸とする方針を固め、以後、新製品開発や事業拡大に力を入れる。

政雄は中田町会議員、帝国在郷軍人会中田町分会長、中田町長としても活躍した。昭和29年に中田町長に初当選し、昭和29年から33年、37年から高岡市と合併する41年までの２期を務めた。午前は役場で執務を行い、午後は会社に向かい、時に田んぼの世話もするという多忙な日々を送った。一方、家庭では６男２女の父であった。人望が厚く、工場の従業員や町民一人一人に声かけをし、「社長さん」「町長さん」と、慕われていた。

政雄は数々の功績が認められ、多くの受賞歴を持つ。昭和32年、薬事功労者として県知事表彰。昭和34年、中田町奨学資金として中田町へ私財の寄付により、県教育委員会から感謝状を授与される。同年、紺綬褒章受章。『中田町報』に寄せられた拝受の所感の中で「少年時代、家庭が貧しかつた為めにいたし方なく進学を中断挫折した当時の印象を忘れることが出来なかつたので…」と少年時代の苦労を回想している。その後も昭和37年、厚生大臣表彰。昭和42年、藍綬褒章受章。昭和43年、高岡市市民功労者表彰。昭和48年に勲四等瑞宝章を厚生大臣室で授与された。

会社が好調な業績を維持していた中、昭和47年脳梗塞で倒れる。しかし政雄の仕事に対する熱意は衰えず、病院にそろばんを持参するほどであった。一時期は職場復帰を果たすまでに回復したが、昭和48年に再発し、同年11月12日に死去。享年74歳。社葬は高岡市中田の善興寺で執り行われたが、小雨の降る中、各界から数百人が参列し、弔電が900通以上寄せられ、花輪が境内だけでなく道路にも並べられるなど、しめやかなうちにも盛大に執り行われた。同年12月４日付けで、従五位に叙せられた。

《参考資料》

「共栄製薬70年史」
「現代立志伝　君たちの明日に太陽を」
「中田町報」「中田町誌」など
ご遺族から聞き取り取材

（藤澤陽子　記）

お知らせ

神保康子さん「高岡市教育功労」を受賞されました

平成 28 年 11 月 1 日（火）、神保康子さんが「高岡市教育功労者」として表彰されました。神保さんは、長年にわたり市内の小学校や保育園を中心に訪問され、昔話の語りや絵本の読み聞かせを続けられました。

また、昭和 60 年から自宅を開放し「やえもん文庫」を主宰されました。「やえもん文庫」では、子ども向けの読み物や絵本など約 5,500 冊が取り揃えられ、市内外から多くの人が訪れていました。

なお、12 月 17 日（土） 2016 年度中日ボランティア賞も受賞されました。

図書館まつり

図書のリサイクル市（グループルーム）

10 月 22 日（土）、ウイング・ウイング祭の一環として、中央図書館恒例の図書館まつりを開催しました。「図書のリサイクル市」では、利用者からの寄贈本や保管切れの雑誌など約 2,000 冊を用意し、来館者に一人３冊までを無料配布しました。

「おりがみでピカチュウをつくろう！」コーナーでの折り紙制作、人形劇団どんぐりコロコロによる「人形劇」、「古文書修復実演」などの行事を開催し、多くの家族連れなどで賑わいました。また、３階カウンター前で「瑞龍寺」をテーマに関連する古文書など資料の展示をしました。

特別整理休館（蔵書点検休館）のお知らせ

蔵書点検作業のため、高岡市立図書館５館が順次休館します。ご迷惑をおかけしますが、よろしくお願いいたします。（休館中の図書の返却は、ブックポストをご利用ください。）

中央図書館　1 月 23 日(月)～ 1 月 29 日(日)　　**戸出図書館**　2 月 15 日(水)～ 2 月 20 日(月)
中田図書館　2 月 3 日(金)～ 2 月 7 日(火)　　**伏木図書館**　2 月 22 日(水)～ 2 月 27 日(月)
福岡図書館　2 月 9 日(木)～ 2 月 14 日(火)

伏木・戸出・中田・福岡図書館利用案内

１月

日	月	火	水	木	金	土
□①	□②	□③	4	5	6	7
8	⑨	○⑩	11	12	13	14
⑮	16	□17	18	19	20	21
22	㉓	□24	25	26	27	28
29	㉚	□31				

２月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	⑥	□7	8	9	10	⑪
12	⑬	□14	15	16	17	18
⑲	20	□21	22	23	24	25
26	㉗	□28				

３月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	⑥	□7	8	9	10	11
12	⑬	□14	15	16	17	18
⑲	⑳	□21	□22	23	24	25
26	㉗	□28	29	30	31	

○印は伏木・戸出・中田図書館の休館日　　□印は福岡図書館の休館日

※ 中央図書館は毎月第４月曜日のみ休館します。（年末年始 12月29日～１月３日 休館）

高岡市立中央図書館　〒933－0023 末広町１－７　TEL（0766）20－1818　FAX（0766）20－1819
高岡市立伏木図書館　〒933－0104 伏木湊町 13－1　TEL（0766）44－0073　FAX（0766）44－0073
高岡市立戸出図書館　〒939－1104 戸出町３－19－29　TEL（0766）63－1254　FAX（0766）63－1254
高岡市立中田図書館　〒939－1272 下麻生 1108　TEL（0766）36－0054　FAX（0766）36－0054
高岡市立福岡図書館　〒939－0132 福岡町大滝 44　TEL（0766）64－1034　FAX（0766）64－1038